

## 世界のくらしと文化

— モンゴル国②

### モンゴル遊牧民の自然観

— 自然に対する畏怖と

ナーダム



モンゴル遊牧民のキャンプ。2つのゲルが並んでいる。この秋、ここでは2世帯が協力して生活している。  
(筆者撮影)

風戸 真理

はじめに

モンゴルの宗教はチベット仏教であるといつてよい。ゲル(移動式天幕)には仏壇があり、経典、仏画、仏像がおさめられている。だが、仏教とやらんで、あるいは混淆して人びとの心に深く根付いているのが自然に対する信仰心である。モンゴルの遊牧民は自然をどのように捉え、そしてどのようにつきあっているのだろうか。

私は、モンゴル国のアルハンガイ県チョロト郡バヤン・ハイルハン行政区(十月号、地図参照。以下、ハイルハンとよぶ)で一九九七年春からの二年間、はじめての長期調査をおこなった。ハイルハンは首都ウランバートルから七六〇キロ離れた約四〇万ヘクタールの行政領域であり、約七〇〇人、一八〇世帯が牧畜を生業として暮らしていた。

モンゴルでは一年は四つの季節として区分され、それは「春」、「夏」、「秋」、「冬」とよばれている。牧民は私に、「日本には四つの季節があるか」としばしば尋ねた。おかしなことを聞くものだと思っていた。なぜなら私自身は、モンゴルに日本と同じように春夏秋冬があること

を当然のこととして受け入れていたからだ。しかしながら、彼らは自身の暮らす自然環境と自身の環境認識を相対化しているのだと気づいた時、私は衝撃を受けた。

ハイルハンの自然は本当に美しかった。幅三〜五メートル、深さ数十センチの小川、ハノイ川の氾濫原は五〜六月にはお花畑となる。なによりも、ハイルハンではどこでも風景のなかに木々があつた。その後、モンゴル国内の木がほとんどみられない地域で長期調査をしてみて、毎日の生活のなかで森や林が見えることが私の心をどれだけ落ち着かせるかをはじめ知った。乾燥した地域にはほとんど木がなく、木陰もない。

#### 一 ハイルハン山への信仰

バヤン・ハイルハン山(以下、ハイルハン山とよぶ)の周囲に広がるのがハイルハン行政区(以下、ハイルハンとよぶ)である。ハイルハン山は小高い独立峰であり、その南裾をハノイ川が西から東に向かって流れている。南西の裾野には行政区の中心地がある。板壁で囲われた集落になっていて、学校と集会所がある。

ハイルハン山の東の中腹には七本の小さなシベリアカ

ラマツが生えている。ほかに樹木はない。この七本の木は「七つの神さま」、すなわち北斗七星と同じ名前でもよばれていた。

ハイルハン山から西へ伸びる稜線には、その鞍部から西側の丘の頂に向かって、十三個の石塚が等間隔で並んでいる。鞍部の石塚は高く大きく積み上げられており、オポーと呼ばれている。聖山のオポーは、山の霊を鎮めるための拝所となっている。オポーの立つ峠は、行政区の中心地から郡の中心地へ向かう道の途中にあたり、自動車、乗用馬、徒歩で多くの人びとが行き交う。人びとはオポーを通り過ぎる時、その周囲を三回時計回りに廻りながら、小石を拾って積み重ねたり、準備してきた布幣や酒、携行している乳製品や紙幣、また火を象徴するマッチなどを供える。オポーはモンゴル中に見られ、多くの人びとから信仰されているオポーには、塚に長い棒が差し込まれ、その棒には新旧様々のカラフルな布が絡みついて風になびき、空き瓶や馬の頭骨、自動車の部品などがうずたかく積まれている。駿馬が死ぬと、その頭は地元のオポーに捧げられるという。

ハイルハン山の呼称である「バヤン・ハイルハン」というモンゴル語の意味は「豊かで、畏れおおい」であ

る。実は「ハイルハン」とは、畏れ敬う信仰の対象を直接に名指すことを禁忌するために与えられた言葉である。この聖なる山には本当の名前があるが、その名を知る人は多くはないという。

この山は古代から特別な意味を与えられてきたようである。それは、山の南面と西面に散らばるたくさんのヒルギス・フルの存在から推察される。ヒルギス・フルはモンゴル語で「キルギス人の墓」という意味である。林俊雄氏によるとこれらは紀元前八〜四世紀につくられた。形状は、小さきさまの積石塚が正方形や円形の石囲により囲まれ、さらにその外周を小さなストーンサークルや石堆が幾重にも取り囲んでいる。このような遺跡は北アジア各地にみられる。

ハイルハン山麓に散らばるたくさんのヒルギス・フルはとても美しい。そして歴史的、考古学的にも魅力的である。私がハイルハン山の石塚群に見入っていたところ、「むやみに見えてはいけない。ハイルハンは恐ろしいのだ」と三三歳の男性ババさん（人名は仮名とする）に止められた。加えて、ハイルハン山をめぐる多くの禁忌を教えられた。それは、ハイルハン山には女性は登ってはいけない、ハイルハン山に顔を向けて用足ししてはい

たババさんのゲルに入り、植物をちゃぶ台に並べた。ババさんと妻はひどくいやがり、早くゲルから出て、ゲルとその周囲に広がる家畜の寝床から遠く離れた場所に捨ててくるように言った。

ババさんは説明してくれた。「植物には聖なる植物と穢れた植物のふたつある。後者をむやみに摘んではいけない」。聖なる植物とは、野生植物のうちで一般牧民が名前と利用方法を認知している少数種の植物である。利用方法には、食用、薬用、茶やガムといった嗜好用、家畜の飼料用などがある。他方、ハイルハンに生育する大半の植物が穢れているという。それらは、牧民が有毒であることを知っている植物、または利用しない植物である。さらには、宗教的職能者すなわちシャーマンだけが知る隠された知識があるという。今になって思えば、私が採集した植物のなかに、シャーマンだけが名前と利用方法を知っている強いパワーをもつ植物が入っていることを、ババさんらは心配したのかもしれない。

### 三 水の精の怒り

翌日、私は釣りをした。ハイルハンの人々は常々、

けないなどである。

バヤン・ハイルハン山は怒りに満ちた恐ろしい存在であるようだ。そして私の調査もハイルハン山の罰にあたって難航した。

### 二 植物に関する禁忌

一九九七年七月、ハイルハン山の植生や植物の利用方法を知るために、植物をよく知っている年長者ダルガさんと一緒に植物採集に出かけた。私たちはそれぞれウマに乗って谷を登り、中流域で降りた。ダルガさんは薬用植物を一握りほど摘んで懐に入れた。私はいろいろな植物を摘んでは彼に見せて名前を尋ねた。ダルガさんは、自分が名前を知らない植物を私が見せると「けがらわしい。捨てろ、捨てろ」と言っていた。花の咲き乱れるたくさんの種類の植物の繁る場所で、ダルガさんはほんの数種類の植物の名前だけを「知って」おり、それは疾病治療などの特定の目的に「よい」と語った。

私は何種類かの植物とキノコをカバンに入れて山を下りた。ダルガさんが知らなくても他の人が名前を教えにくれるかもしれないと思つてのことである。寄宿してい

「ハノイ川には一メートル以上の大きな魚がたくさんいる。それをピロシキのように料理すると絶品だ」と自慢していた。私はその大魚を自分の目で見て、釣つて、食べてみたくて、水が温むのを待っていた。

ついにその時がやってきた。そこらじゅうで跳ねているイナゴを捕まえ、これを釣針につけた糸を水の中に垂らす。三〇〜四〇センチ前後の魚が食いついた。サケ・マス科のカルスやアムールイトウなどである。魚がエサに食いついた瞬間、もう片方の手ですばやく糸を引き、手を中心に糸で弧を描くように魚を川岸に振り上げる。ハイルハン若者が作つた釣針には返しがなかった。

たくさん釣れた魚をもってババさんらのキャンプに戻つた。これを見た人々はいへん恐れ、ババさんの妻は自分の家の竈で調理するのをいやがった。調理を許してくれた隣人宅でも、焼き上がったムニエルをすすめたところ大人はほとんど食べなかつた。内臓や身をイヌにやつたが、いつも腹をへらしているイヌたちも魚はほとんど食べなかつた。これまでハノイ川の魚のおいしさを語っていた人びとは、「話したり、聞いたりするのと、実際に食べるのとは違う」と言った。

その翌日、雨が降り始めた。やまない雨は二日間降り

続いた。ハノイ川は氾濫し、洪水になった。ハノイ川沿いに集中してキャンプしていた多くの牧民のゲルが、浸水し、家財道具が濡れた。雨のなかゲルをたんで牛車に積み、安全な場所に引越していく人びとの姿がみられた。ババらのキャンプはわずかに小高い場所を選んでいたので、氾濫原の中で無事であった。

この長雨と洪水のあいだ、折りも悪しくも私は下痢と高熱にたたられた。人々は、植物を採った罰で私が病気になるのだとか、魚を釣って「ロス」(水の精)の怒りに触れたために洪水が起きたのだと語った。

#### 四 ハイルハン山を鎮める祭

ハイルハン山は「土地のもち主」であるという。ハイルハン地域のすべてのもの、すなわちハノイ川とそのロス、牧地、聖なる植物、穢れた植物などのすべてがハイルハン山の精霊の管理のもとにあるのである。三日間やまない雨や洪水は、ロスの親玉であるハイルハン山のたたりであると考えられているのである。

このような怒りに満ちたハイルハン山を慰め鎮めるため、毎年ハイルハン山のオボーを祀る。オボーの天高く

伸びる形は、モンゴルの人びとが究極的に信仰する「天」と人間の生活圏である地を結ぶものである。オボーを通してハイルハン山を祀ることで、恵の雨を乞い、その一年間の気象の安定を願う。

六三歳のドージさんは「ハイルハン山の奉り人」とよばれている。ドージさんの両親がハイルハン山の奉り人だったので、彼とそのキョウグイも山を奉まつているという。

祭の手順は、まずドージさんが自分のヒツジを一頭屠殺する。その臀部から脂肪尾にかけての肉と脂肪を骨ごと、幅約二五センチ、長さ四〇センチの長方形に切り取って茹でる。ほかに馬乳酒、牛乳の蒸留酒、その他の乳製品を準備する。これらを携えて早朝オボーに向かう。オボーに着くとドージさんは食べ物を供え、酒を振り撒く。この礼拝に参加したい人は男女を問わずオボーに集まる。ここでは全員が少しずつ食べ物の分配に預かり、ともに食べる。その後、ドージさんはウマに乗ってひとりでハイルハン山中腹のヒルギス・フルルに向かい、そこに供物の一部を捧げる。

午後、オボーに捧げるための運動競技会が催される。この競技会は、競馬、相撲、そして地方によっては弓道

を加え、「勇者の三種の武道祭(エリン・ゴロブン・ナーダム)」、通称「ナーダム」とよばれる。ドージさんは賞品を用意して、この日のために練習を積んできた参加有志の成績優秀者を祝福する。ハイルハン山の祭は、山の奉り人が祭司となり、山の拝所であるオボーに犠牲と武芸を捧げ、土地の精霊たちの親玉である聖山の精霊を鎮める祭なのである。

#### 五 モンゴルのナーダム

自然に対する宗教的な儀礼であったナーダムは、社会主義期にその性格を変えた。主として、七月十一日の革命記念日を祝うものになったのである。だが「土地のもち主」に奉納するためのそれは「オボーのナーダム」とよばれて細々と続けられてきた。なぜなら、「土地のもち主」は自然の荒ぶる力と豊かな恵との両方を支配するきわめて強い力を持ち、社会主義の開発でさえもこれを制圧できなかったからである。

モンゴル高原の年間降水量は一五〇〜四〇〇ミリ程度、つまり日本で台風の一晩で降る雨の量ほどしかない。しかも年による変動が激しく、かつ予想がつかない。

い。夏に雨が少なければ干ばつが、雨が降りすぎれば洪水が起きる。冬に雪が少なければ春の芽生えが悪くなり、豪雪の年は家畜が雪の下の草を掘りだして食べるこ

とができずに弱って死ぬ。今日のモンゴルでは、競馬と相撲は伝統的な武芸であると同時に、巨大なビジネスとなっている。政治との関係も深い。モンゴルの競馬と相撲と弓道は、日本のそれらと比べると一見ゆつたりとして見えるかもしれない。

しかしモンゴルの「三種の武道」は、人間にはどうすることもできない自然の脅威のもとで生きる人びとの、自然に対する畏敬の念に裏打ちされた厳肅な行為であり、同時に、豊かで短い夏の楽しみなのである。

(かざと まり/京都大学地域研究統合情報センター・研究員)